

# リーダーシップについての研究～中竹竜二 VS 清宮克幸～

## A study about the leadership～Ryuji Nakatake VS Katsuyuki Kiyomiya～

1K05B056

指導教員

主査 間野義之先生

小峰 徹也

副査 横山文人先生

### I. 序論

今回の卒業論文という大きな題材があったときに、私は今まで人生の大半をかけてきた、ラグビー・その中で特に早稲田ラグビーにかけてきたものは人一倍強く、数ある大学のラグビー部の中の早稲田大学で長きにわたって培われてきた伝統や存在について改めて知る機会だと思った。そのテーマを研究する上で、歴史をはじめとするバックボーンについて研究することは不可欠なものであり、道半ばで倒れた偉大な先輩もまたしかりであると思う。そこで私が入部したときから、低迷していた早稲田ラグビーを復活・再生させ、大学選手権優勝に導いたカリスマ清宮克幸氏と現監督の中竹竜二氏からみるリーダーシップ像について取り上げたいと思う。ここでは早稲田大学ラグビー蹴球部の歴史と OB である奥克彦氏と宿沢広朗氏、そして部の伝統について述べている。

### II. 先行研究の検討

先行研究として中竹竜二元監督と清宮克幸元監督の2人の独自のリーダーシップについて述べてある。中竹氏はフォロワーシップというリーダーシップの在り方を、清宮氏はカリスマ的なリーダーシップを元にチームを牽引している。リーダーシップの違いについて二人の著書を先行研究としている。

### III. 研究の目的と方法

本研究での目的は2点である。①本研究では清宮・中竹両氏の選手から見た監督像をポイント制で統計を取り、互いの特徴を観察する。②また

監督像の理想を、①と同じ質問と統計方法を取り、観察する。研究の方法として清宮・中竹の両監督に直接指導を仰いだ4年生に対しアンケート調査を行い、様々な項目における両監督の相違点や類似点を探しリーダーには何が必要で何が不必要かを調べていく。

### IV. 結果

今回のアンケートで得られた結果を平均し、t検定・重回帰分析によって分析した。監督構成要素として、選手から支持されるには“カリスマ性”の要素は絶対になくはないものであることがわかる。また、外的結果においてはあまり両方で値が大きく違ってくることはなかった。

### V 考察とまとめ

これまで早稲田ラグビーの変遷とリーダーシップについてみてきたが、早稲田大学ラグビー蹴球部という組織はどんなしがらみがあるかと“赤黒”“荒ぶる”がどんなことよりも高位にあり、至上命題、それがアイデンティティーなのであることが改めて身にしみるものだ。90年の歴史の間、大半のものは荒ぶるを手に入れることができなくて、そのまた大半のものが赤黒を着ることができなかった。今自分に与えられている使命が大きなものであることをもう一度考えなくてはならないと思う。リーダーシップは監督・キャプテンはもちろん、発揮する能力があるものは学年分け隔てなく発揮しなければならないのは、チームを同じ方向に導くために必要不可欠のことである。今回は歴代主将へのアンケートも考えたが実現できず、新たな発見をする

ことができなかったが、監督でもキャプテンでも通ずるものは同じ傾向にあるだろう。今回のアンケートで最初に行った質問の両監督の組織論について、フォロワーシップを唱える中竹氏の理論がより組織論を構築しているかのように思われていたが、清宮氏のカリスマによって統制されたトップダウンの組織もまた認められており、機能していたことがわかった。バックアップ体制は両監督の時もしつ

かりと整えられており、この点は両氏の功績といえることができるだろう。こういった数値が出ることは改めて両氏が選手のために何が必要で、何が求められているのかが理解できている証拠だろう。その両氏に流れている監督の血は奥さんや宿沢さんらから受け継がれたものが流れており、それが90年の長きにわたって組織を支え続けているひとつであることは間違いない。